



Title	精神分裂病者の両親の人格特徴 : ロールシャッハ・テストによる自我構造論的検討
Author(s)	古荘, 和郎
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31304
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	^{ふる} 古 ^{しょう} 莊 ^{かず} 和 ^お 郎
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 3 2 0 2 号
学位授与の日付	昭 和 49 年 10 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	精神分裂病者の両親の人格特徴 —ロールシャッハ・テストによる自我構造論的検討—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 金子 仁郎 (副査) 教 授 佐野 勇 教 授 関 悌四郎

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

精神分裂病の病因追求の一方向である家族研究は遺伝生物学的立場からの研究と社会心理学的立場からの研究とに大別される。社会心理学的立場からの家族研究において明らかにされてきたことのひとつは、精神分裂病者の自我発達の障害は有害な家族環境に由来するということであり、それは精神分裂病の病因の重要な部分を占めると考えられている。

自我発達の場としての家族環境の最も基本的な構成要素は両親の人格特徴（自我構造）である。

この研究は、上に述べたような位置づけを有する両親の人格特徴をロールシャッハ・テストを用いて自我構造論的立場から統一的・有機的に明らかにするとともに、その特徴の意義を発達論的見地から検討し、さらにその特徴について、両親という組合せに関する検討をもあわせて行うことを目的とするものである。

〔方法ならびに成績〕

1. 方 法

治療的接触により詳細に観察された精神分裂病者（20名）の両親を対象として、一般的方法でロールシャッハ・テストを施行し、下記の構造式を用い、全体反応の全反応数に対する比率によって対象の群別（ $W\% < 25$, $25 < W\% < 50$, $50 < W\% < 75$, $W\% > 75$ の4群）を行って、その自我構造論的特徴を明らかにした。そこで得られた特徴を発達論的見地から小学生群のデータと比較検討した。さらに、両親の特徴として得られた結果を夫婦という組合せとして見た場合の問題について検討を加えた。

反応数と基礎形体水準	把握型	全体反応の構造による分類 ※	※ a : synthetic whole b : gross-compositional whole c : spread figure on ground d : analytic-compositional whole
R (F + %)	W-D-d-Dd F % (M : SumC)	a · b · c · d	
	体験型		

2. 成績

- 母親群は把握型において、20名中10名が $W\% < 25$ の群に集中し $W\% > 75$ に属するものを見ず、d, Ddの多発を伴う者が多いという特徴をしめした。(母親群では $W\% < 25$ の群において $d > 10\%$ 5名, $Dd > 10\%$ 8名, 小学生群では典型的な1学年において $W\% < 25$ 群で35名中 $d > 10\%$ 24名, $Dd > 10\%$ 15名)。母親群のこの特徴は小学生群が発達的な特徴としてしめした初期集約型と一致するものであるが、小学生群の場合はdとの結合傾向が強く、母親群ではDdとの結合傾向が目立っている。体験型においては $W\% < 25$ の10名中9名が共乏型をしめした。
- 父親群の特徴は全体反応の垂型の出現率において認められた。すなわち、小学生群においては、c型全体反応がa型全体反応を上まわるか同等の値をしめすのは $W\% < 25$ の群のみであり、 $W\% > 50$ の群では各学年を通じてa型はc型の倍以上の出現率をしめし、初期集約以後は総合知覚を指向するという発達の展開が認められたのに対して、父親群では $W\% < 50$ で $a < c$ であり、 $75 > W\% > 50$ で $a \div c$, $W\% > 75$ で $a : c = 5 : 4$ でありc型の優位性が顕著である。体験型においては父親群を代表する $50 > W\% > 25$, $75 > W\% > 50$ の2群の12名中8名が共乏型をしめした。
- 両親を夫婦という組合せでみると、母親が $W\% < 25$ (A) をしめすもの(6名)では父親は $50 < W\% < 75$ (C) をしめすものが多く(4名)、母親が $50 < W\% < 75$ (C) をしめすものでは、すなわち、母親の $W\%$ が増加する方向をとると、父親は逆に $W\%$ が減少する方向に動き $25 < W\% < 50$ (B) をとるものが多くなる(6名中3名)という傾向がみられる。また、Aへの索引力が減少する方向を持つ組合せ、C-B(母親がC, 父親がB), C-C(両親がC)では逆に父親の特性としてとりあげられたc型全体反応が優位となり、A-Cでは父親のa型全体反応とa型以外の全体反応との比率は同率であるがC-Bでは2.3 : 7.3, C-Cでは4.0 : 13.0となっている。

〔総括〕

母親群の初期集約的特性は、発達的な初期集約の後の年代に当然出現してくるはずの自我機能すなわち細部に対する可能な配慮をしめしながら不必要な不一致点を無視するという自我の柔軟性の欠如と中心同時転換の困難性に原因しており、さらに、この特徴はDdとの結合傾向、すなわち、図形の形体的特性を無視しやすい傾向と結びついて、狭小化した自己枠が周囲の条件を無視して持続されやすいことをしめしている。

父親群におけるc型全体反応の優位は中心同時転換にしめされる自我の柔軟性の欠如に由来している。中心同時転換にしめされる自我の柔軟性、総合性は他者との相互性樹立にとって最も大きな要因となるものである。

体験型においては、両親はともに共乏型をしめし、これは外的条件に対する感受性や対応のあり方、

自己の内面性とそれに対する感受性のいずれにおいても狭小化した姿勢を持っていることをしめし、把握型においてしめされた特徴とともに家族内の人間的相互性に対して大きな困難をもたらすことが想定される。

両親を組合せとしてみた場合、両親は常にその子供たちに養育的環境を準備するものとしては、より困難な相互性をもたらすであろう方向に互に牽引し拘束しあっているとみることができる。

論文の審査結果の要旨

精神分裂病者の自我発達の歪みはその家族環境に由来していると考えられ、家族ことに両親の人格特徴は病者の自我発達にとって重大な影響をおよぼすものである。著者はロールシャッハ・テストを構造論的な立場から用いることによって、両親の人格特徴の意義を(1)発達論的観点から、小学生群を参照して明らかにし、さらに、(2)両親の組合せにおいて、それぞれの特徴がどのように関連しあっているかを明らかにしている。

発達論的観点からの知見は、病者の家族内における人間関係の不毛性がいかなる両親の人格特徴によって生じるかを明らかにしており、また、組合せをしてみた両親の特徴が抜きさしならない関係で子供たちに病因的な影響を与えていることを明らかにしている。これらの成績は精神分裂病の家族研究に新しい観点からの知見をつけ加え、ひいては、精神分裂病の病因論に重要な指針を与えるものであり、学位論文として十分価値あるものと認める。